

第15章 通貨の進化

● 序章

・通貨は進化現象であり、商人のあいだに次第に現れたのであって、統治者によってつくられたものではない。

・具体的事例はイギリスの産業革命黎明期の話。18世紀、町に出て賃金をもらって働く貧困者の増加。雇い主に硬貨の不足という新たな問題をもたらす。銀貨や銅貨が足りなくなったが王立造幣局は当時、貨幣の鋳造量を増やすことを拒んでいた。その結果...

→偽造貨幣の使用

・マシュー・ボールトンは新しい公式貨幣をつくる権利を認めてもらうため、議会で請願したが却下された。トマス・ウィリアムズは縁に文字を刻んだ偽造しにくい効果を鋳造したが、王立造幣局は反応しない。そこで...

→彼は自分でペニー銅貨と交換できる合法の「ドイルド」と呼ばれるトークン（代用貨幣）をつくった。これは完全な民間通貨となる。

・その後民間で硬貨を鋳造する習わしは広がっていき、小銭不足の問題は解決し、銅貨発行の民営化につながった。

・造幣局は十分な硬貨をつくることを拒んだだけでなく、近代的な手法を取り入れようとしなかった。ここで、マシュー・ボールトンが蒸気プレスで公式ペニー銅貨をつくる権利を勝ち取る。さらに彼が銀貨を鋳造しはじめると、王立造幣局もようやく議会で働きかけ独占権を回復する。

・民間のトークンは1809～10年にもう一度活躍する。イギリス諸島で起こった深刻な貨幣不足に対応するため、銀貨、銅貨、トークンの鋳造を始めた。しかし、縁故独占を好む政治家の反対により、トークンは法律で禁じられる。その結果...

→再び偽造硬貨が流通。

● スコットランドの実験

・通貨の進化に関するさらに有力な銀行として1716年から1844年までのスコットランドが挙げられている。それを支えたのは自己統制的な通貨制度である。

・1707年の連合法のもと、スコットランドは、自国の通貨をイギリスポンドに合わせて切り下げた。通貨発行の独占権を持つ中央銀行としてスコットランド銀行があったが、ロンドンの議会は1751年に起こった老僭王の反乱がスコットランド銀行に影響を及ぼすことを懸念した。そのため、民間のロイヤル銀行に通貨発行の権利を与える。互いに相手の紙幣を受け入れあうことで合意した。この制度は競争によって自己統制。

・その結果、この反乱時もスコットランドの銀行は金融不安を起こさず、危機を乗り切った。イギリスでエア銀行が倒産した時も、破綻の道連れになったスコットランドの銀行はわずかだった

→この危機の際に主要銀行が小規模な銀行を救っただけでなく、将来的に制度全体の信頼性が高まった。

コメント

硬貨が不足した時に偽造貨幣が増えたりと厳しい状況の中でも、民間で代用貨幣をつくるなどして協力して、人々が正当な貨幣で悪貨を駆逐していく姿勢が貨幣の制度を保っているのだと感じた。

マカライ・マラクローザーの救いの手 担当：橋本

- ・ イングランドは頻繁な銀行破綻と信用危機が発生
- ・ スコットランドがうまくいっていることに嫉妬(内容：少額の紙幣発行禁止 等)
- ・ ウォルター・スコット卿が「マカライ・マラクローザー」名義の作品で、スコットランドの通貨制度を国有化しようとする財務大臣ピールの試みに激しく抗議
- ・ 1844年ピール銀行条例
 - この法律によりイングランド銀行が中央銀行として銀行券の発券を独占することとなり、それ以外の銀行の銀行券発行が制限されることとなった
(金融危機の際には政府は条例の効力を保留することが可能)
 - 結果的に1847年・1857年・1866年に実行された
 - マカライ・マラクローザーは正しかった

中央銀行抜き金融安定

- ・ 通貨は進化する ex. スウェーデン、カナダ、アメリカ
- ・ 金本位制・中央銀行・最後の貸し手・多くの規制がなくても、国が不換通貨の安定した流通を行うことはできる
- ・ 中央銀行制より自由銀行制のほうがはるかに優れた実績がある
 - 中央銀行制度(トップダウンの通貨制度) ex. イングランド銀行、フランス銀行
 - 自由銀行制度(ボトムアップの通貨制度) ex. スコットランドの銀行

チャイナ・プライス

- ・ 2008年世界金融危機
 - 直接的な要因：資産価格(とくに不動産価格)の過剰なバブルが崩壊したこと
- ・ 住宅バブルが膨らんだ要因
 - ① 中国が輸出戦略を推進するため、通貨を切り下げ、世界的アンバランスが生まれた
 - ② 欧米経済に押し寄せた低金利ローンの波は、資産価格インフレを引き起こした
 - ③ 無責任な融資が当局によって積極的に推進された

コメント

1994年に起きた中国の元安は当時世界中からの反感などなかったのか気になった。これから世界金融危機が再び起きたりするのだろうか。もし金融危機が起きた際にインフレが進行していると打つ手がないからなのか、米利上げのニュースをよく見る。日本では日銀の資産がGDP越えというニュースがあった。日銀がたくさん株を購入し、私たちの年金積立金が株へ大量に投資されている現状が、将来どのように影響するのか整理しておかなければいけない。もし決定的な株価暴落が起こった時、株なんて持ってないから自分に関係ないで終われないと思う。日本の中央銀行さんは打つ手などあるのだろうか。

どこまでファニーのせいなのか (担当 川村)

*1938年：ルーズヴェルト政権は、銀行が相手にしないような中間所得者に住宅ローンを提供するために、連邦住宅抵当金庫「ファニー・メイ」を設立

銀行から住宅ローン債権を買い取ることで運営。政府の後ろ盾がある故に債務不履行も問題ではなく、費用は納税者負担であった。

*1960s：リンドン・ジョンソン大統領はファニー・メイを「政府支援機関(GSE)」として半民営化

*1970s：連邦住宅金融抵当公社「フレディ・マック」も加入

どちらも政府の後ろ盾があり、借入コストは抑えられた。

財務省の信用供与枠であったが、実質無制限。事実上、表向きは民営、実態は公営であった。

*一方、商業銀行は、「ACORN」のような団体から、融資基準を下げるよう圧をかけられた。

*1992年：ブッシュ・シニア政権のもとで、ACORNの働きかけにより、ファニー・メイとフレディ・マックは、優先的潜入能力を資本市場で発揮するようになる。

*また、ACORNはクリントン政権に、低所得者への融資指示をノンバンクまで広げるように促した。

*サブプライムローンの急増はトップダウン的なものであり、規制緩和が原因というのは作り話。

*2000s以降：ファニーとフレディのサブプライムローンの買取は勢いを増し、銀行などの貸し手による住宅ローンは白熱し、豊かな収穫を促した。その裏側では議員への献金、着服が相次ぐ。

*政府が住宅供給への過剰投資を積極的に促進させることは、いずれ大きな損失になるという警鐘にも似た声もあった。

*それでもますます引受基準は下がり、サブプライムローンの受け入れは拡大し、やがて債務不履行が雪だるま式に増加していった。

*信用力の低い借り手に無責任に融資する誘因は、規制緩和や新たな利益追及というよりも、政府と圧力団体のところにある。

*金融危機は、規制が弱かったから効果がなかったから起こったわけではなく、政府の住宅政策が引き起こした。

*サブプライム危機は進化現象ではなく、特殊創造論的現象だった。

コメント

サブプライムローン問題は経済学部である私にとってよく聞く単語ではあったが、進化と結びつける、という考えがこれまでなかったため、面白い見方であると感じた。しかし、トップダウン的なものであるとしたら、予測して防ぐことや損害を抑えることは可能だったのではないかと思う。

【モバイルマネーの進化】(担当:濱崎)

- ・政府による通貨独占は、イノベーションと実験をつぶすだけでなく、インフレと品質悪化にもつながり、金融危機だけでなく、格差も生じさせる。
- ・国はまだ存在さえしないお金を使い、特権階級の銀行は新たに鑄造された貨幣を最初に手に入れて、資産の取得原価が増大する前に投資できる。
- ・通貨が一般の人々に届くまでに、その価値は減る。(→カンティロン効果)
- ・通貨発行に関して政府の独占を終わらせることがきわめて重要である。

・新しいかたちの自律的通貨が次々と生まれている

→航空会社のマイル、携帯電話のクレジット、ビットコイン

Ex)ケニアの携帯電話マネー

- ・2000年代初め、ケニア人は携帯電話の通話ポイントを一種の通貨としてメールで互いに融通し合うようになった。
- ・そうして生まれた「Mサペ」のおかげで現在、人々は現金を携帯電話に振り込んだり、代理店経由で引き出したり、携帯電話どうしで送金したりすることができる。
- ・システムの成功要因は、主に規制機関が締め出されていて、システムが進化するのに任されていたことがある。
- ・つまり、参加して、取引を行うことが合理的であると考えられるほど、多くの人がMサペを使っている状況になった。

・通貨の主な三つの機能

→①価格の保存、②交換の媒体、③計算の単位

・通貨へのもう一つのアプローチ

→他に用途がないのでら何処かで急に需要が急に増える事はないが、希少性は揺るがないのでその価値が保たれると期待できる、「人工のもの」を見つけること。

・ビットコインの登場

→暗号通貨の意味するところも近年のその進化も奥が深く、通過というテーマをはるかに超えている。

コメント

モバイルマネーは私たちの生活にとって、かなり身近な存在である。筆者が述べている通り、私も自律的通貨は、そのうち公式の通貨に変わっていくだろうと考える